



「日本のマスコット」であり「列国環視の真つ只中に起つ偉大なるスフィンクス」<sup>3)</sup>と称されたように、日本の敗戦までは青年将校のみならず広く社会全般から注目され、人気を集めた立志伝中の人物だったことである<sup>4)</sup>。

これは荒木が貧しい生活の中から陸軍士官学校に入学して大将・男爵にまで出世したことや、天皇を中心とした国家への忠誠心の意義を繰り返したことなどに象徴される。荒木の考えは「荒木イズム」<sup>5)</sup>、その称賛者は「荒木宗」<sup>6)</sup>の宗徒になぞらえられたほか、荒木の八字鬚の容貌と日本刀を仕込んだ軍刀<sup>7)</sup>、結婚に際し妻となる栗原錦子に送った手紙<sup>8)</sup>、日々の家庭生活から愛犬シト一号も含めた家族の動静<sup>9)</sup>、ロシアで荒木が拘束された顛末を題材にした戯曲<sup>10)</sup>、さらに登場したばかりのトーキーを用いた映画『非常時日本』(1933年)への出演など<sup>11)</sup>、荒木にまつわるあらゆることがニュースソースとなり、言わば消費されたのである。荒木の伝記はこの様子を次のように伝えている。

その当時の将軍に対する国民の敬慕の念は文字通り灼熱的なもので日常の新聞、雑誌、シヨウウインドの写真、さてはデパートの売場にまでその似顔や肖像が陳列され、また子供の凧の絵や玩具類にまで八の字の美鬚を持つ将軍の似顔が絵書れ

“荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なし”

と齒の浮く様な軽薄な風評に対しては、当時将軍は秘そかに眉をしかめゑる事が屢々であつた<sup>12)</sup>。

荒木を顕彰する叙述であるという点は割り引く必要はあるが、上に紹介した以外にも、生まれた子供に貞夫と名づける人が多かったこと<sup>13)</sup>、荒木貞夫にちなみ芸名を「荒木貞子」と改名した女優<sup>14)</sup>、書が高値で売買されたこと<sup>15)</sup>、一たび床に臥したことが知られば「薬を贈る者、療法を告ぐる者」が自宅に殺到したことなど<sup>16)</sup>、荒木熱を伝える挿話には事欠かない。現在に至るまでの日本の政治家を想起しても、荒木の人気を「荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なし」<sup>17)</sup>と評価することは決して誇大ではない。

ただこうした同時代的な人気にもかかわらず、荒木貞夫に関する学術的な関心は、長らく低かった。それには次のような理由が考えられる。まずは戦後日本の歴史学の世界で軍隊や軍人を正面から検討することがはばかれたことである。荒木に限らず、軍や軍人そのものに関する研究が相対的に停滞していたのである<sup>18)</sup>。加えて荒木が皇道派を代表し、その議論に観念的・精神論的なものが多いこと<sup>19)</sup>、また二・二六事件後は軍の主流から遠ざけられたことも関係しよう<sup>20)</sup>。

2つには、すでに戦後1950年代半ばの段階で、上下二冊で1000頁を越える伝記により事実関係は整理されていたためである<sup>21)</sup>。一般論として、ある程度の情報に満たされていれば、それ以上を改めて知ろうという気持ちにはなりにくい。著者の橘川学は20数年にわたって荒木に師事した新聞記者で<sup>22)</sup>、両書は荒木の直話に基づくと思われる情報もふんだんに盛り込まれている。荒木を「哲将」と称し、文中でも荒木を「將軍」と表記するなど、荒木の顕彰が前提となっている点は注意を要するものの、荒木に関する基本史料としての価値は依然高い。

3つには、「荒木陸相の全貌は余りにも知れ渡り」<sup>23)</sup>、作家の武田泰淳がいみじくも「さかんにしゃべりまくり、書きまくっているから彼の文章をしらべる資料に不自由はしない」<sup>24)</sup>としたように、荒木に関する情報とそれに基づく記憶が、戦後しばらくは存在し続けたためである。これは上述の理由2とも繋がることである。

荒木の動静は、戦後も折に触れて新聞・ラジオ・テレビで取り上げられ、「五箇条の御誓文や教育勅語は立派な最高道徳」<sup>25)</sup>、「戦争中にあったことを、いつまでもグズグズいうのは間違い」<sup>26)</sup>、「戦争は自衛戦争だから、反省の余地はない」<sup>27)</sup>といった戦前と同様の発言は、「無責任なA級戦犯」などと、しばしば批判の対象となった<sup>28)</sup>。

むろんそうした中でも皇道派としての荒木への関心は存在した。秦郁彦の研究はそれを代表しよう。秦は軍ファシズム運動を検討する中で皇道派の性格についても検討し、皇道派の幹部に共通した心性が、観念的革新論、天皇親政

論、尚武的日本主義、親分子分的人情主義といった諸要素で構成され、それが強烈な反共主義につながっていたとした。また荒木についても、持ち前の饒舌で盛んに国体精神の昂揚を説き、人気に応えたものの、青年将校の暴発を十分に押さえる力もなく、当初期待されたほど急進的でないことが暴露すると、ただちに軍中枢から捨てられる運命にあったと結論づけた<sup>29)</sup>。

21世紀に入ってから、従来とは問題関心を異にする研究が複数登場した。そのうち宜野座菜央見は、大阪毎日新聞が主導し荒木の演説を基調に作られた映画『非常時日本』を分析する中で、荒木についても触れ、浅草育ちで明朗能弁な精神主義者である荒木はメディアの時流に乗り、その公的イメージが同時代のメディア文化の中できわめて有効で、マスコミが荒木を利用する一方、軍もまた荒木を通してマスコミを利用したとの興味深い指摘をしている<sup>30)</sup>。

日中戦争期に荒木が持っていた博物館構想に着目したのが後々田寿徳で、荒木が私塾を経営していた父親の影響を受け、日本の近代的な学校制度に批判的で、昭和初期には科学博物館設立を計画していたことを検討した。また荒木の少年時代の教育観が文相時代の教育政策に少なからぬ影響を与えている可能性についても指摘している<sup>31)</sup>。

ロシア通として知られた荒木のソ連観を検討したのが富田武である。荒木が帝政ロシア以上に労農ロシアを警戒し、北満洲からのソ連駆逐を念頭に置いていた点、また日本の満蒙權益についても、荒木が日本人の矜持を取り戻し、皇道を世界に宣布するといった意味を付与した点を明らかにした<sup>32)</sup>。このほか荒木陸相時期の経済構想を分析した桑田翔は、同時期の経済政策構想には統制への志向と社会政策を通じた大衆の生活擁護という傾向が見られ、それを荒木自身もある程度容認していたと見ている<sup>33)</sup>。

こうした先行研究に触発されながら、本稿では荒木貞夫の中国認識について、その講演録を含む著述や論稿、雑誌・新聞記事を主な材料に検討する。ただ結論を先に言えば、荒木の中国への言及は多くなく、内容もロシアに対する議論と比較して深みはない。荒木には中国の長期滞在の経験はなく<sup>34)</sup>、自身も「支那の方は甚だ素人で、僅に一二回の旅行したに止まる」と述べていた<sup>35)</sup>。

後述するように、荒木は1926年に中国を視察し、張学良・居正・張継・孫科・許崇智・胡適・孫伝芳ら要人と会見しているが、そこでの議論も必ずしも噛み合っているとは言えない。そもそも荒木が中国について言及する場合、その力点は、中国の事例を紹介することで日本人の奮起を促すことに置かれる場合も少なくなかったのである。

ただ荒木が満洲事変勃発から満洲国成立にかけての時期及び日中戦争勃発直後という、いずれも日中関係の重要な時期に台閣に列していたことを考えれば、その中国認識を整理しておく意味はあろう。以下では行論の必要上、まず簡単に陸相就任に至るまでの荒木の経歴を整理した上で、その中国に関する議論を見ていきたい。

## 1 人間荒木貞夫の形成

### (1) 生誕からロシア駐在まで

荒木貞夫は1877年5月26日、東京麴町に生まれた。父貞之助は浅草田原町に私塾芳林分塾を経営しており、貞夫もほとんどそこで生活した。ただ保証人として父親が借金を背負っていたこともあり、一家の生活は厳しかった。荒木はこの父親のもとで四書五経や春秋左氏伝といった中国の古典籍を学んだ。後年、講演の中で中国の古典を引用して話を展開している例が多数確認できるが<sup>36)</sup>、その背景には父親に鍛えられた漢学の素養があったことは間違いない<sup>37)</sup>。

14歳になった荒木は杉浦重剛経営の東京英語学校（後の日本中学校）に進んだ。自ら内職をして学費に充てたが3年で退学し、以後は父の学校を助けるかたわら独学を続けた。

荒木にとっての転機は、二度目の挑戦で1895年に陸軍士官学校に入学したことである。士官候補生となったことで、以後荒木は家計を支えることになった。この時期には、後に荒木がロシア通となるきっかけとなる出来事もあった。それは4年先輩で教官だった多賀宗之<sup>38)</sup>からロシア研究を託されたことである。多賀は「今迄ロシアの研究をして来たが、事情あつて今度支那へ行く



日露戦争中の荒木貞夫<sup>40)</sup>

事となった。君は今後ロシア問題と取り組んでシツカリ勉強してくれ」と、荒木に後事を託し、所蔵のロシア語書籍も荒木に譲った<sup>39)</sup>。

ロシア通として知られることになる荒木誕生のきっかけとして印象的な挿話だが、同時に多賀のロシア畑から中国畑への転身からは、陸軍における「支那通」と「ロシア通」の心理的距離感の近さもうかがえ興味深い。

1897年に陸軍士官学校を卒業した荒木は、近衛歩兵第一聯隊附となり、1902年には陸軍大学校に入学した。1904年2月に日露戦争が勃発すると、近衛後備混成旅団副官として従軍し、南満洲の南尖澳に上陸し、鳳凰城・榆樹林子・平台子・遼陽・双龍寺・本溪湖・八家子・奉天・鉄嶺などを転戦した。

この時期の中国に関する挿話として、「抜け目のない支那人」が戦場で拾い集めた葉莖を、日本軍が「お願いしてこれを買取ると云う奇現象が生れた」というものがある<sup>41)</sup>。後年荒木は「支那人は、金に対しては非常に忠実」と分析しているが<sup>42)</sup>、すでに日露戦争の時にそうした意識が胚胎していた可能性はある。

戦争終結により荒木は再開した陸軍大学校に戻った。この時期、陸軍大学校で幹事（校長を補佐し庶務を担当）を務めていたのが日清戦争で参謀として情報工作に携わった宇都宮太郎である。晩年荒木は、宇都宮の「支那四億の人心をどうつかむか、日支両国がしっかりと手をにぎるにはどうすればよいか」といった大陸論に大いに傾倒し、足繁く出入りしたと振り返っている<sup>43)</sup>。

1907年11月、荒木は陸軍大学校を首席で卒業し、阿部信行・真崎甚三郎らとともに軍刀を下賜された<sup>44)</sup>。卒業後、最初の配属先は参謀本部の露西亜班で、荒木は1909年12月から1913年4月までロシアに駐在した（このうち1912年5月



からは駐ロシア公使館附輔佐官)。帰国後荒木は陸軍大学校教官などを務めるが、欧州大戦勃発後の1915年4月には再度ロシアに出張し、6月から翌18年4月までは観戦武官としてロシア軍に従軍、7月までシベリア及び北満洲（ハルビン）に滞在した。さらに11月から翌19年7月まで浦塩派遣軍参謀を務めた。

合わせて8年近くロシアに滞在した荒木だが、ロシアに関する文章は1910年代末から確認される<sup>45)</sup>。その内容は実体験に基づくと思われ、ロシア語を二葉亭四迷に学び、「もつと勉強しなくてはならぬと、キツク叱られた」こと<sup>46)</sup>、ロシア人の悠長な気質がロシアの自然環境に根差している点、ツルゲーネフやトルストイの作品を愛読し、プーシキンの詩に劣らずレールモントフの詩が好きなど<sup>47)</sup>、いずれも具体的である。

反共の立場で知られる荒木だが、ロシア人への評価はこれとは別だった。「ロシア人ほどいい人間はない。人間として一番親しく握手の出来るのはロシア人である」<sup>48)</sup>、「世界諸民族の中で大ロシア人ほど、最も純朴で、気宇の大きい、親切な素質を有するものを私は知らない」<sup>49)</sup>や「大ロシア人そのものは実に愛すべき人間であり、茶飲み好きな民族性やサモワール、トロイカの気分、風俗も習慣も好ましい微笑ましいものである。これは我々日本人と実にぴつたり呼吸の合するところで、これこそ真の白露両民族の親善であらう」<sup>50)</sup>など、ロシア人やその文化・風俗への評価は極めて高い。またその書き振りのもと、同時代日本の代表的「支那通」として知られる後藤朝太郎の中国叙述を彷彿とさせ、情感がこもっている。先述の荒木の愛犬の名<sup>51)</sup>もおそらくロシア語のシユトー（что, 何）に由来しよう。

## （2）中国視察旅行——国民党西山派要人との会談

1925年5月、荒木貞夫は参謀本部第一部長に就任した。第一部は作戦の総元締めであり、参謀本部の中核である。翌1926年7月、中国では蒋介石が北伐を再開したが、その直前、荒木は本庄繁（在華公使館附武官）と共に中国関内の視察旅行をおこない、北京・鄭州・湖南・湖北・上海・蘇州・杭州・青島などを訪ね、中国の要人と会談した<sup>52)</sup>。

北京では「支那通」として知られた軍人坂西利八郎ばんざいの紹介で北京大学教授の胡適と会談した。荒木は「東洋思想の根底をなす「礼」について強調し、日支両国間の基本をこれに置いての親善を説いた」。これに対し胡適は、「それは全く誤りです。支那が減じたのも実は繁文褥礼がその原因の一つです。人間は須く「利」を以て立たねばならず、万事は利に基調してゐるのです。従つて利によつてのみ国が興るのです」と応じた<sup>53)</sup>。アメリカに留学しプラグマティズムを学んだ胡適ならではの返しと言えるが、荒木が胡適との会談について講演会で語った形跡はない。おそらく内心不満だったのであろう。

一方、天津での中国国民党西山派要人（居正・張継・孫科・許崇智ら）との会談については、講演でも言及している。中国国民党西山派は、国民党と共産党の合作に反対した党内最右派だったが、党内での勢力はそれほど振るわなかつたグループである<sup>54)</sup>。

会談ではまず西山派から、日本の食糧問題・人口問題解決を中国が支援することを条件に、日本には今少し、中国への態度を改めてほしいとして、次のような発言があった。

日本は糧食・人口問題で御困りであらう、その糧食は支那で上げませう、人口さばの捌ける口も拵こしらへて上げませうから、支那に対する日本の態度は今少しそれらしく、師事しじまでなくとも、その生活せいかつほん本家であるやうに考へて呉れ

これを聞いた荒木は、日本は中国を侮ったり、仇敵視しているわけではないのだから、中国に頭を下げて日本の面目を捨ててまで、問題を解決する必要はないと考えたようである。そして次のように返答した。

大きな御世話で御座る。食ふことは我々がやつて参ります。日支親善は単に日本の食ふ問題生きる問題ではない。一体貴あな方は東洋の天地を何と御覧になるか、日本人は食へねば何とでも工夫いたします。米が無ければこ



れを作る方法を考へます。<sup>げんこん</sup>現今増加した人口に対して、米産はこれを養ふだけの量を得てゐます。又<sup>たとえ</sup>仮令米産が不足しても<sup>かゆ</sup>粥位でも生きてをれます。

これに対する西山派の反応は不明だが、取り付く島もない荒木の返答に、驚いたに違いない。にもかかわらず荒木はさらに公家や明治維新の事例を挙げ、粥の話を掘り下げた。

昔日本の公卿様はちやんと茶粥で生きてゐた。幕末には米産不足の藩では茶粥を奨励し、それで十分明治維新の大業をなし遂げたのである。現代に於ても二木謙三博士は、一日に三度も飯を食はない二度も食はない。然し立派にやつてをられる。粥だつて<sup>おもゆ</sup>重湯だつて生きて行けぬことはない。

たしかに居正・張継・許崇智は日本に留学経験があり、並の中国人に比べれば日本事情に通じていたであろう。とはいえ公家の茶粥や当時日本では著名だったとはいえ二木謙三の話を出されても<sup>55)</sup>、説得に効果があったとは思えない。ただ構うことなく荒木は、大所高所より日中関係を見る必要があるとして、次のように話をまとめた。

日本には昔から「武士は食はねど<sup>たかようし</sup>高揚子」といふ思想さへ養成せられてゐる。そんな唯物的の観念で日支問題を見られては困る。更に大所高所より日支の関係を見やうではないか<sup>56)</sup>

荒木本人としては、してやったりという思いだったのであろう（だからこそ講演会でもこの挿話を語ったのである）。ただ引用したやり取りからもわかるように、双方の話は必ずしも噛み合っておらず、荒木の対応も、大所高所より日中の関係を見たものとは言い難い。

むしろ西山派とのやり取りからわかるのは、荒木が中国の下手に出ることに

忌避感を持っていた、ということである。この感覚は満洲事変勃発の最大原因は、中国が日本を侮ったことにある<sup>57)</sup>、との意識にも繋がっていたと考えられる。

なおこの視察旅行で荒木は張学良や孫伝芳（浙閩蘇皖贛五省聯軍総司令）とも会見している。張学良については張が愛人との観劇のために荒木との会見を中座したこともあり、具体的な感想は確認できないが（不満ではあったようだ<sup>58)</sup>、孫伝芳については、単に武力ではなく民意を得るために善政を施そうと、「内治には可成り努力をして居つた」と評価している<sup>59)</sup>。

一方、蔣介石や汪精衛など、北伐後の中国を牽引することになる国民政府中枢の要人と荒木との交流は確認できない。荒木には「蔣介石に与ふると共に我が同胞に懇<sup>うつつ</sup>ふ」という談話録があるが<sup>60)</sup>、そこでも蔣との交流をうかがわせる発言はない。荒木の性格を考えれば、もし面会したのであればそのことに触れるであろう。荒木の訪中が北伐の直前だったことを考えれば、国民党中枢との直接の交流はなかったと判断できよう。このことは後述するように荒木が古い中国観を持ち続けたことにも影響したかもしれない。

### （3）陸軍大学校卒業旅行——中国民衆の生活力を知る

1929年3月から<sup>61)</sup>、荒木は陸軍大学校校長として、自ら学生を引率して南満洲を巡った。南満洲は荒木にとって日露戦争の記憶の刻まれた懐かしい場所であったが、「至るところ毎日、排日」の様相を呈しており、満洲の各駅では荒木の来訪を伝え聞いて集まった在留日本人から口々に排日の苦情を聞かされた（口述記録でも「そのときの満洲の情勢は、それこそ一触即発です」と語っている）。また奉天から騎馬で一時間ばかりの高梁畑では、鶏を盗んだ廉で撲殺した盗人の遺体をそのまま放置して動じない農夫の様子に、「正に無警察状態の怖ろしき風景」との感慨を抱いている<sup>62)</sup>。

おそらくはこの時の知見であろう、荒木の講演では次のような旅順・大連での挿話も取り上げられた。当時、旅順・大連は日本の租借地関東州の中心地として多数の日本人が生計を営んでいたが、旅順で荒木が衝撃を受けたのは、ま

だ人々が寝しずまっている早朝から籃を背負って街のゴミをあさり、金になるモノを集めている中国民衆の姿であった。また大連では日本商人の販売するビールや豆腐の価格が、中国商人のそれよりも割高で、商売に負けているという話を聞くが、次のような理由を知り納得している。

……それは日本人は総ての物を電話で注文をとり、支那人をして配達せしめるのである。豆腐屋までが洋服を着て、煙草を燻らして支那人に豆腐を担はせてお顧客先を歩かせて居るのである。一方支那人は数年経つて其の業を覚えてしまふと、自ら豆腐を造つて、自分で担つてお顧客先を歩いて日本人が売るよりも安く売るのである。それは当然であります。電話も使はなければ使用人を雇つて居ないのでありますから、自然費用が省けますから——さうして日本人は段々支那人に商売を取られてしまひます。又支那人はビール箱などを壊します時でも、丹念に釘を抜いて、板は綺麗に揃へて、其の釘を揃へて其の釘の値は幾ら、其の板は幾らと、ビールダーズの値段から、それだけのものを差引いた後のビールを売ります。又、雇人も使はずに自分でお顧客先きを廻るから、それだけ安く売れるのであります。所が日本人は其の箱は皆捨て、しまふと云ふやうな工合である。此処が日本人の支那人に経済的に敗北する所以なのであります<sup>63)</sup>。

当時の大連では、現地漢字紙『泰東日報』の編輯長傅立魚<sup>ふりつぎよ</sup>が、華商の当面の課題は、日本人商工業者が持つ技術やその精神的背景を形成している近代文明的諸価値を吸収し、それを日本人以上の水準にたかめることにあると主張していた<sup>64)</sup>。荒木の証言はそうした中国商人の状況を実見した事例としても興味深い。

この大連の挿話と同様の筋立ての話は、荒木が熊本の第六師団長在任時(1929年4月～31年8月)に訪問した台北に言及する際にも登場する(ただしビールと豆腐は氷になっている)<sup>65)</sup>。少なくとも荒木が「支那人には日本人にも及ばない所もあり、又吾々に解し得ない所の作用もある」と、中国人の生活

力を評価していたことがわかる。

ただいずれの場合も、荒木の狙いは「勤勉と云ふことに就いては、今日の状態ではまだ甘んずる訳には行かない」<sup>66)</sup>と、日本人を鼓舞することにあつた点は注意したい。荒木にとっての重要事は日本の将来であり、その大陸政策は「小我的の功利主義」を超えたより高きもので、「日本を救ひ、東洋を救ひ、而して世界をも救ふため」のものだったのである<sup>67)</sup>。

#### (4) 荒木の国家観——熊本の乞食

荒木が講演会でしばしば言及した熊本在任中<sup>68)</sup>の乞食にまつわるエピソードにも触れておこう。そこには荒木の国家観が明確に表れているからである。

話は荒木の住む官舎の向かいにあつたお稲荷さんの祠の前に毎日店を出していた乞食に関するものである。このお稲荷さんは花柳界からの信仰が厚く、「綺麗な人」が朝夕お詣りにきており、乞食にも恵んでいた。その乞食は、前に台所、うしろに本箱、真中が寢室兼座敷となつた車の中で日がな一日、悠々と構えて本を読んでいたが、調べてみると千円から二千円の貯金を持っていたという。荒木曰く「町費も所得税も府県税も取られず（中略）一寸見ると中々羨ましい」のであつた。しかし荒木は、それでは国民として相済まない、日本国民としての責務を果たさなければならない、と次のように続けた。

……若し唯生きて行きたいと仰言るならば、何もマルクスに願ひして、やれ政治機構がどうの経済機構がどうのといはずとも、宜しくこの熊本の乞食の許<sup>もと</sup>に行つて、渡りをつけ、その近所にをれば食うては行けるのです。併し、考へてみるまでもなく、之<sup>これ</sup>では生甲斐がないではないか、之では魂がないではないか、国民として相済まぬではないか。（拍手）国と致しましても同じです。もし国が魂なしでやるならば世界の乞食国になれば宜<sup>よ</sup>い。（中略）我々は等しく日本人である。日本国民としての総ての責務を負うてゐる。また義務を果さねばならぬのである。もつと大きく申上げれば、皇猷扶翼の大任を果さなければならぬ。何処までも我国の道、我国

の本念、我国の徳を發揮しなければならぬのであります<sup>69</sup>。

このエピソードは荒木の講演や著作でよく取り上げられており<sup>70</sup>、それだけ荒木の信念を象徴したものだと考えられる。西南戦争の年に生を受け、陸軍士官学校に進路を取り、日露戦争に参戦した荒木は、近代国民国家として成長する日本と自身とをおそらくは何の疑問も懐くことなく重ね合わせていたと思われる。そうした荒木にとって生きるということは、日本国民としての責任を果たすことと同義であり、無為に生きることはあり得ないことだっただろう。

近代の日本でこうした感覚を持った日本人は珍しいわけではない（その証左に上述の講演でも拍手が湧いている）。ただ荒木は熊本で日々乞食の姿を目にしていたことで、より具体的なものとして意識されていたと言えるかもしれない。またこうした感覚は、裏を返せば当時の中国のような国民国家形成や国民統合が遅れた社会に対する偏見にも繋がったと考えられる。満洲事変後、荒木は「支那は、過去二十年間禍乱相次いで、未だに統一的中央政府すら有せず、全く国家としての実体を具へてゐない」<sup>71</sup>と語っており、この発想は中国非国論<sup>72</sup>とも通じるものであった。

## 2 政治の世界へ

### (1) 満洲事変の勃発と陸相就任——「混乱する中華民国」

1931年12月、満洲事変勃発後の閣内不統一で若槻内閣が倒れた。後継の犬養内閣で陸相に就任したのは「全陸軍の輿望」を集めた荒木だった。「この超非常時に満州地図を備えないとは奇怪千万」と怒号して、早速閣議室に満洲地図を掲げた荒木だったが<sup>73</sup>、教育総監部本部長の経験はあったものの、陸軍省や参謀本部での勤務経験はなく、その陸相就任は異例の人事であった。

そうしたこともあり社会一般の荒木に対する関心は高く、荒木が用いた「皇軍」という言葉も広く人口に膾炙するようになった。ただ荒木は「皇軍」の首唱者ではない。「皇軍」の首唱者が荒木との説は戦前から存在し<sup>74</sup>、1918年頃から荒木は「皇軍」を使い始めたとし<sup>75</sup>、荒木首唱説を追認する研究もあ



「非常時日本の同胞に懇ふ」講演中の荒木貞夫<sup>78)</sup>

る<sup>76)</sup>。ただ実際にはすでに日清戦争中に「皇軍」の用例は複数確認できる<sup>77)</sup>。実情は、荒木の陸相就任により「皇軍」という言葉が広く一般化した、ということだろう。

さて荒木の満洲事変観については次の3点、①事変の原因は西欧から輸入された「支那民族」の唯物思想が、日本の民族精神・国民道徳（三種の神器の伝える公明・仁愛・勇断の三徳）を冒瀆したことで、条約の蹂躪や権益の侵害といった末節的問題ではない、②日本が中国から軽侮されたことにより、日本は全世界からの軽侮をも招き、国際的に孤立したが、それは結局日本国民自身の罪である、③中国が反省しその道徳学を実行すれば、満洲問題は容易に片付く<sup>79)</sup>、④満洲国は、不明瞭で混乱する中華民国の主権下にあることに嫌気がさした〔東三省の〕住民が、中国から分離独立したものである<sup>80)</sup>、とまとめられる。

こうした一方的な視方は、上述した中国非国論的な発想とも繋がっていたと考えられる。ただ続く部分で荒木が満洲問題よりもモンゴル問題の方がはるかに大きな障害であるとし「ロシアの蒙古領有を絶対に許すことができない」と、モンゴルへの注意を促している点は<sup>81)</sup>、ロシア通ならではの視点と言え<sup>82)</sup>、興味深い。

満洲事変に関連して、荒木が「東洋平和会議」開催を主張したことにも触れておこう。これは1935年に開催が予定されていた第二次ロンドン会議に先駆けて、日本の首唱によって米・ソ・中・英・印・仏・蘭・満等の関係国を集め、満洲国承認問題も含めて「一切の過去の行掛りを清算して東洋平和工作の大綱」決定を目指すものであった<sup>83)</sup>。ただ満洲国の参加を絶対的条件としている

点で実現が困難なことは明白で<sup>84)</sup>、囂らずも政治家としての荒木の未熟ぶりが露呈することとなった<sup>85)</sup>。

陸相時期の荒木がベトナム亡命者を支援していたことにも触れておこう。当時ベトナム阮朝の王族クォン・デ（疆楫）は日本に亡命しており、犬養毅らが支援していたが<sup>86)</sup>、犬養死後（詳細な時期は不明ながら1933年中頃から年末頃）クォン・デほか同志は、軍資金獲得のため荒木を訪問した。荒木は「懇切に〔クォン・デ〕侯を引見し、その企図しているところを聞いて大いに感動し、一見旧知の如く、肝胆相照らした。そして荒木は、貴族院議長の近衛文麿に添書を書いた」という。こうした支援を受けクォン・デは世田谷の東松原に本拠を移しベトナム留学生受け入れのための学生寮をつくった<sup>87)</sup>。

ベトナムの亡命者へのこうした対応には、荒木自身が「いやしくも歴史と伝統を持つ独立民族を併合することは誤りであり、夫々の姿に於て幸福が齎られる様にすべきである」との考えを持っていたことも影響しよう<sup>88)</sup>。荒木はロシア滞在中に、ロシア帝国から圧迫されていたカザツク人の様子を見て民族の悲哀を感じたといひ<sup>89)</sup>、韓国併合に反対する書翰を宇都宮太郎に送るなどしていた（口述記録でも同様の発言をしている）<sup>90)</sup>。

## （2）日中戦争の勃発と文相就任——「支那膺懲には先づ国民党を撃て」

陸相として脚光を浴びた荒木だったが、病のため1934年1月に辞任し、さらに36年3月には二・二六事件の責任をとって予備役に編入され第一線から退いた。しかし1937年7月に日中戦争が勃発すると、首相の近衛文麿は事変解決に向けて荒木の協力を仰いだ。同年10月、荒木は日中戦争に関する政治方針を諮る目的で新たに設けられた内閣参議に就任し、さらに翌38年5月には文部大臣となった。もっとも文相は名目上の地位で「専ら事変の解決処理に御協力頂き度い」というのが近衛の意向だった。

戦後の伝記によれば、この時期荒木は「万難を排しても事変を急速に止めさせる必要がある」<sup>91)</sup>と考えていたとされる。ただ東洋経済新報記者だった三宅晴輝は、1938年初頭にある会合に荒木を呼んで陸軍部内の諸情勢を語らせたと



ころ、荒木は「陸軍は分派争いが激烈で手がつかん。この情勢は外戦へもつて行くほかない。戦争をすれば、この分裂抗争している陸軍も八割方はまとまる」と語ったとする<sup>92)</sup>。事実ならば荒木は日中戦争を利用して陸軍の統一を狙っていたことになる。

当時公表された日中戦争に関する議論からも、戦争を止めさせようとする荒木の意志はうかがえない。荒木は、侮日・抗日・排日の主張は中国国民のものではなく、第三インターナショナル（コミンテルン）の影響を受けた〔国民党〕党部の意志であるとし、「支那膺懲には先づ国民党を撃て」と述べた<sup>93)</sup>。そして日中の戦争は「支那と手を握るための戦ひ」であると、次のように続けた。

……この戦は支那と手を握るための戦である。支那を教へるための戦である。そして反省した後のその後に対する一つの睨みである。故に手を握る戦であつて、勝つて敵に恨まれる、反対にその人々に親しまれるのが、日本の軍隊の教である。而して今回の日支事変は、勝つて彼に感謝をさせるだけの用意がなければならぬと思ふ。悪魔を倒すための戦ではない。友達を誅めるための戦であり、友達を改心させるための戦である<sup>94)</sup>。

こうした荒木の日中戦争観はその後も変わらず「今事変の本質より考へ単に南京、徐州の陥落を以て、吾人は其手を緩め、安心をすることは出来ない」<sup>95)</sup>、「僅かこの一年の戦果を以つて事足りりと為し目的完成近しと断定するのは早計」<sup>96)</sup>といった主張が繰り返された。

満洲事変後の段階で、荒木は中国軍の実力を疑っており、「支那軍隊の督戦隊の如く、前線の自らの部隊を監視する隊形を必要とするに至つては、其軍隊の威力は既に疑問視せらるゝのである」<sup>97)</sup>と語っていた。また蒋介石の中国支配についても「日本が御手伝をしなければ駄目だ」、「〔蒋介石が〕来つて日本に一切を委す、東洋安定は日本に委す、此の一言を彼が発しなければ駄目だ」<sup>98)</sup>などと語っていた。こうした荒木の態度は、少なくとも日中戦争勃発後

もしばらくは継続した。荒木にとって中国は依然として「暴戾なる支那」であり「膺懲」の対象だったのである。

1939年8月、平沼内閣が総辞職した。近衛内閣から引き続き文相の任にあった荒木には後継首相の話もあったが、結局実現しなかった。荒木は新たに成立した阿部内閣では内相を打診されたがこれを断り、続く米内内閣まで内閣参議を務めた。

1941年7月、三度目の組閣をした近衛文相は、荒木にも内閣参議就任を懇請した。しかし荒木は、すでに日独伊三国同盟が締結の運びとなり、また大政翼賛会成立も確定した段階にあっては参議の仕事もない、として参議就任を辞退した<sup>99)</sup>。こうして荒木は政治の第一線からは退いた。

### (3) 中国観の変化——「民族意識に目覚めたる日支提携」

以後、日本の敗戦にいたるまで中国や日中戦争に関する荒木の発言で確認できるのは、1941年の「事変四周年に際して」だけである。ただ、そこには日中戦争から一年を迎える時期までの議論とは明らかな変化がみられる。

荒木は「対支政策は当初に於ける確固不動の方針に変わりはない」としながらも、「支那事変の目標たるは、民族意識に目覚めたる日支提携で（中略）東洋文化の建設は彼に其の民族的情熱あり、我にまた民族的意慾と誠実あつてこそ、新しき世界観に立脚した大文化を押し立てることが出来る」と、中国の民族的な情熱にも言及した上で、日中両国の文化交流の意義を唱えた。「膺懲」「第三インターナショナル」といった字句も姿を消した。また南京の汪政権と重慶の蔣政権を対立的にとらえる見方についても、「南京も重慶も畢竟するに表裏一体の支那民族である（中略）心臓は一つで、血は双方に通つている」点を最も考慮すべきと批判した<sup>100)</sup>。日本との和平を標榜し、抗日陣営を離れて組織された汪政権にも民族的情熱を認めているのである。

こうした変化は直接には1938年11月の東亜新秩序声明、さらに1940年3月の汪精衛政権の成立など、日中の政治情勢の変化に沿ったものとも考えられるが、併せて荒木自身の心境にも変化があった可能性がある。というのも翌1942

年に満洲国政府より建国十周年の式典への招待、及び放送局から満洲国人（所要時間10分）及び在満日本人（同約40分）に対する放送依頼があったが、荒木はこれを辞退しているからである（この経緯については口述記録にも「私はお断りしたんです。内心で引っ掛かったんです」と言及がある）。

結局放送依頼の方は、満洲国への祝賀ではなく、その現状に遺憾を呈するものでも可、との条件で引き受けたが、そこで荒木が口にしたのは「曾ての理想たる“王道楽土、五族協和”が今や“王道苦土、日日親善”の姿へと変貌してつた」という嘆きであった。ここには満洲国が当初の理想とはかけ離れてしまったことへの批判が込められていたのである<sup>101)</sup>。

こうした荒木の対応をどのように考えるのかは一筋縄ではいかない。ただ荒木の発言や行動から推察するに、率直な心情の吐露であったと思われる。荒木が誰に対しても率直な人柄であったことは有名で、当時の荒木評でも、「荒木自身には恐らく総理になり度いといふやうな個人的志望はないであらう。これは、かれの清純にして率直な人格から見ても想像されることだ」<sup>102)</sup>といったものがほとんどであった。荒木の政治的未熟を批判するものはあっても<sup>103)</sup>、その人柄を攻撃するものは確認できない<sup>104)</sup>。

政治評論で知られた新聞記者の山浦貫一は、荒木は義理人情にかたいとして、次のように語っているが、その性格を的確にとらえていよう。

荒木といふ人は、松岡洋右と同じやうに、こつちには口を開かせないで、自分の勝手なことを、勝手なだけ饒舌るといふ性である。由来多弁、能弁な人物に大人物ないし悪人があつたといふ歴史を読んだことがない（中略）この人のいゝ所は義理人情にかたい点だ<sup>105)</sup>

日中戦争が長期化する中、荒木は中国や満洲における民族意識を認識しつつあったのである。

### 3 戦後の活動

#### (1) 日本敗戦と戦犯指定——巣鴨での日々

日本の敗戦後、荒木はA級戦犯として極東国際軍事裁判の法廷に立った。開廷冒頭の罪状認否の際には、「平和戦争人道の犯罪に対しては、荒木七十年の生涯に……」と自己の信念を語り出したため、制止させられるなど、健在ぶりを見せつけた<sup>106)</sup>。

荒木と同じく巣鴨プリズンに収監されていた笹川良一は、相変わらずの「精神家荒木」の風格を次のように記録している。

頭髪もすっかり白くなり曾ては天下をヘイゲイした鼻下の八字髭も純白と変じ五・一五事件前後の颯爽たる姿はどこにも見られなかったが、是は獄中生活の為と言ふよりも寄る年波のせいであったであろう、それでも例の如く胸をそって歩く独得の姿勢は失はず相変らずの「精神家荒木」の風格を備えていた、どこかに好々爺らしい一面も浮び出てゐたが是も誰もがあの年輩になれば自然ににじみ出てくるものゝ一つで、既に覚悟は充分に出来上ってゐる落ちつきを持してゐた<sup>107)</sup>。

笹川の証言に違わず、「精神家荒木」は獄中でも非礼な態度の米兵看守には容赦なく「無礼者！」と怒鳴りつけ、その後の対応には英語の話せる重光葵が駆り出されるのが常だった<sup>108)</sup>。1948年11月、東京裁判が結審し荒木貞夫には終身禁固の判決が下ったが<sup>109)</sup>、1955年6月には病氣療養のため仮出所が認められた<sup>110)</sup>。

#### (2) 日本社会を憂う——「心配していればこそ進歩がある」

戦災で幡ヶ谷の自宅は焼けていたため、荒木一家は北多摩狹江にある1500坪の禅寺の借地に移っていた<sup>111)</sup>。荒木自身は敷地内にある四畳半の小屋に居住し、読書や揮毫をして過ごした<sup>112)</sup>。家には次男と妻がいたが、「三男は戦死」「娘むこはまだソ連」と、荒木家にも戦争の傷は深く刻まれていた<sup>113)</sup>。

出所後の荒木は、1955年夏から晩秋にかけて『時事新報』に自身を振り返る聞き取り「風雲三十年」を連載したほか<sup>114)</sup>、日本社会のありようにも関心を持ち続けた。「細いズボンを穿き、マンボとかいう踊りに狂つて何が楽しいのか」と社会における「建設精神の欠如」を嘆きながらも<sup>115)</sup>、現状を「虚脱時代、パチンコ時代、芸能時代である」などと批判的に分析し、「五カ条の御誓文を法律の基調とすれば、立派な法律ができる」<sup>116)</sup>と理想を語り続けた。

一方で荒木は、自身の責任についても「日本を破滅の戦争に導いた世潮に対して身をもって阻止し得なかったことについて深く反省し、その責任を痛感」していた<sup>117)</sup>。ただ日本の対米英宣戦布告の段階で荒木が政治の第一線から退いていたこともあり、ここに自身が輿論を導いたことへの自覚はうかがえない。たとえ反省していたとしても、こうした姿勢では、戦後の「荒木が得意の神がかり論で、軍国主義を鼓吹したことは、隠れもない事実である。竹槍百万本で、ソ連と対抗できると考えたのも彼だつた。その荒木が、国際軍事裁判では、平和主義者だつたと申立てているのである。あきれて物もいわれぬとは、こういう時に使用する言葉なのであろう」<sup>118)</sup>といった批判を納得させることはできなかったであろう。

自身に対する世間の厳しい雰囲気は荒木も感じ取ってはいたようで、「雑誌や新聞で、よくわしの談話を書くが、いつもほんの一部しか書かないで、しかもそれだけを見て、大宅壮一とか坂西志保とかいう連中が、くいついてくるんで困るよ」<sup>119)</sup>と語っている。

幸い荒木は健康だった。1日2回、起床後と就寝前のスウェーデン体操を日課とし、「欲望は人間を短命にするので、欲望を少なくするように」心がけていたのもよかったかもしれない<sup>120)</sup>。スウェーデンは荒木曾遊の地で、荒木はそこでの食餌療法や体操療法や文化水準の高さに感心し、戦後も「もう一度訪ねそして生活してみたい」という希望を持っていた<sup>121)</sup>。

荒木は自身が奮発する理由を、戦後も政界で活躍していた鳩山一郎や重光葵の名をあげ、次のように語っているが、そこにはまだまだ現役でやれるとの意気を感じることができよう。

……ある雑誌は荒木は「憂国病」だといった。しかし人間が明日を心配し、明年を心配し、百年後を心配しなくて進歩があり得ただろうか。心配していればこそ進歩があるのである。気遣と人が言つてもよい。私は怒りはしない。むしろ喜んで聞くであろう。(中略) 鳩山君が総理大臣をやつていれば、私も奮発せねばなるまい。片足になつたとしても、重光君はやつていないか。それなのに五体健全な私がどうして休んで草花いじりをしていられるだろうか<sup>122)</sup>。

他にも「これから速記を勉強したい」<sup>123)</sup>と語るなど、出所後の荒木は意気軒昂である。

このように戦後も戦前と変わっていないように見えた荒木だが、その変化を感じ取っていた人物もいた。実業家で趣味人としても知られた菅原通済である。「字ほど人格のあらわれるものはない」と考える通済は、荒木についても興味深い挿話を残している。日中戦争勃発の頃、爆弾三勇士の石碑を立てるにあたり、陸相の荒木に下字(魏々赫々爆弾三勇士賞勲碑<sup>124)</sup>)を書いてもらったところ、「驕り高ぶった字で、おもしろくもおかしくもない」と悲観した通済だったが、戦後次のようにその評価は一転したという。

……つい先ごろ拙宅で墨跡展をやったときに〔荒木が〕おいでになり、朝から夕方まで熱心に書き写していたが、そのお礼状をくださったのを見て驚いた。いつの間にかりっぱな字になっている。老筆とはいいながら、僅か二十年の間に、こうも閑雅で端直になるものか、やはりおごり高ぶったころの字にはケレンがあってダメだが、と、つくづく考えさせられた<sup>125)</sup>

戦後も戦前と同様に言論活動に積極的だった荒木だが、日本の敗戦や戦犯としての拘留を経て、その心中には変化が生じていたのかもしれない。

### (3) 中国への眼差し——中国共産党への期待と失望

このように戦後も雄弁だった荒木は、中国に関しても発言を残している。書斎にはアグネス・スメドレーの『偉大なる道』も並べていたというから<sup>126)</sup>、中国共産党の動向についても関心を持っていたのだろう。巣鴨から出所した翌年には、「毛沢東は一九六〇年までに日本を赤化すると言っている」<sup>127)</sup>や、中国共産党が伝統と文明を抹殺しかねないと警戒しながらも、将来は東洋文明の保持で提携すべきとして次のように述べている。

……中共に対してはわれわれの先覚者がたびたび叫んだように、中国領土の保全、東洋文明の保持——今日の中共はあの長い伝統と大陸文明を抹殺しかねないが、(中略) 中共は今は共産圏にあるが、やがてはかれと手を握つてこの尊い東洋文明の保持、確立に力点を置いて頂きたいと考えております<sup>128)</sup>。

1957年にも「中共に対しては亜細亜民族の独立と亜細亜文化振興に協力すべき様強調しこれが世界平和の道あるを示す。これが理解できれば貿易も進む」との発言が確認できる<sup>129)</sup>。荒木は日本の提携相手として中国共産党の将来に期待を持っていたと言える。

ただこうした思いは文化大革命の勃発により打ち碎かれる。文革が勃発した1966年には「現在の中共は根本より狂っており、文化の高い中国古来のものを忘れて野獣に均しき狂える現〔代〕文化の跡を追うとして居る。悲しい哉と言うより外はない」<sup>130)</sup>と中共に対する期待は失望感に代わっている。

やや抽象的ながら、漢民族に対する発言も確認できる。「老将軍と女優」と題する中村メイコとの対談では、地球上に最後まで残る民族は漢民族で、日本も漢民族にやられてしまう、といった発言を残している。発言の意図はややわかりにくいだが、日露戦争の際に垣間見た中国人の姿や、戦前の大連や台北で体験した、日本商人を駆逐する中国商人の印象を戦後も持ち続けていたと言えるかもしれない(以下、引用文の下線は筆者による)。



荒木〔前略〕話はとぶが、この地球上に、一番あとまで残る民族はと  
いうと、漢民族（中国人）だという説がある。日本人は、とうの昔にその  
中にはいっとる。そして、さらにずうっと経って人間が滅亡したあとに  
は、ネズミが残るだろう。これはネズミ算という言葉のあれからきてると  
思うんだが、もう一つの説があって、最後には猫が残る、という。ネズミ  
を食うから〔か〕という、そうじゃない（笑）猫というのは、いろん  
な医学的検査をやっても、ちっとも本質的に変化せんということなんだ。  
もとが消えないから、猫が残るだろうという話でね。〔中略〕

メイコ なるほど……。

〔中略〕

すごくお元気に見えますが、いまおいくつですか？

荒木 三十五（笑）いや冗談でなしに。わしは、自分の年齢は気力で考  
えればいいと思う。今の日本の状態を見て、このままにしておいたら、ネ  
ズミの天下になるまえに漢民族にやられてしまうから、生きている間に、  
いろいろやらねばならないと思えば気力がでますよ<sup>131)</sup>。

1966年10月30日（教育勅語発布の日）、荒木貞夫は奈良の橿原神宮に参拝  
し、いくつかの講演をこなしながら十津川村に向かった。十津川は、南北朝時  
代の歴代南朝勢力はもちろん、幕末の天誅組にも縁のある場所で、そこでの史  
跡調査は荒木かねてからの念願だった。

11月1日には土地の人々と懇談し、帰宿後は揮毫などをして就寝した荒木だ  
ったが、夜半に心臓の発作を起こした。医師の手当てで一時は回復し、午前中  
は引き続き良好だったが、2日午後3時40分に発作が再発し逝去した<sup>132)</sup>。数え  
年90歳。大往生と言えよう。

荒木の逝去についてジャーナリストの大宅壮一は、麻雀牌の「東」がいかにめ  
しいヒゲをつけた荒木の顔を連想させるため、「荒木さん」と呼ばれていたエ  
ピソードを交えつつ、荒木の東洋的精神主義が毛沢東の「東風は西風を圧す  
る」の「東風」に通じると指摘している<sup>133)</sup>。荒木が聞けば、毛沢東との対比

に驚いたかもしれないが、少なくとも戦後の荒木が文化・文明のレベルで中国をとらえようとしていたことと符合しており、興味深い視角である。

## 小結 荒木貞夫をどのように評価するか

昭和戦前期に一世を風靡した軍人荒木貞夫の中国観とはどのようなものだったのか。本稿では荒木の言説を主な材料に、その分析を試みたが、その内容は概ね次の4点にまとめられる。

1点目は、荒木の中国認識の基礎には明治以来の大陸経綸の意識があったと考えられることである。これは宇都宮太郎への傾倒などからうかがえる。もともとロシア通として知られた荒木のロシア観に比べると、その中国観はそれほど深みのあるものではない。荒木の中国滞在は、ロシア滞在に比べれば短く、本人も中国事情については素人であると述べていた。

2点目は、それでも荒木は中国人の生活力に関しては相応の評価をし、日本人もそれを見習うべきとの意識を有していたことである。これは日露戦争やその後の満洲訪問での知見に基づいていたと考えられる。

3点目は、中国の抗日の輿論に対しては強硬的な態度を示し、満洲事変から日中戦争勃発後に至るまで基本的には「暴支膺懲」の姿勢を堅持したことである。これには荒木が中華民国の統治には懐疑的で、中国非国論的な意識を有していたこと、また国民政府中枢の要人とは直接の交流を持たなかったことも影響していよう。

4点目は、政治の第一線から離れた後の1941年の荒木の議論からは「暴支膺懲」的な姿勢がなくなり、中国の民族的情熱をも受け止める議論に変化していることである。同時期には満洲国の現状に対しても批判的な姿勢も見せるなど、荒木の認識にも変化がうかがえる。そしてこうした意識は、中国共産党を警戒しつつも、東洋文化の保持や日中連携の点では期待を寄せるといった形で、戦後にも継続されたと考えられる。

荒木が閣僚として政権に関わった時期は、奇しくも満洲事変と日中戦争が勃

発した日中関係の転機と重なった。荒木が発した中国に対する強硬な姿勢がどこまで社会に影響を与えたのかについて知るすべはないが、国家の指導者としての責任は免れ得ないだろうし、冒頭で述べたように荒木が「日本のマスコット」、「偉大なるスフィンクス」であったことを踏まえれば、その影響力は並の政治家を超えていたとは言えよう。

その一方で人間としての荒木は部下からも慕われ、戦前はもちろん戦後も熱心な信奉者がいたことからわかるように魅力的な部分を持つ好人物だった。満洲事変の功績により男爵に叙せられた後、「待ち合いで芸妓たちが「大将閣下」とよぶと、つねに「男爵様といいなさい」と応じつつ、髭をこすってニヤリと笑った」という荒木だが、この挿話も自身が華族になった嬉しさの表れもあろうが<sup>134)</sup>、それよりも、むしろ芸妓をからかって周囲に笑いを提供していたのではないかとも思われる。

こうした人物の評価をいかにするべきなのか。古代ギリシア哲学の研究者として知られる田中美知太郎が興味深いエッセイを残している。田中は、荒木が法政大学で顧問や予科講師を務めていた1930年代に、同大学に奉職していた関係で、二度ばかり荒木を直接観察することができたのである。

興味深いのは、田中から見ると、大学側の連中の追従に比べ、むしろ荒木の方が控えめで、節度があるように見えた点である。そして普段は荒木に対して何の好意も持たず、新聞紙上であらわれる荒木の言行にも「馬鹿な」と思うだけだった田中でさえ、実際の経験では多少違うものを感じたというのである。

わたしは二度ばかり、荒木を見たことがある。一度はわたしのつとめていた私立大学の何かの会が、九段の偕行社で行われた時で、大学側の妙な演出に、かれが一役買わされて出て来たらしかった。軍服姿のかれが言ったことは、大学側の連中のお追従に比べると、むしろ控え目のものであった。かれは〔バーナード・〕ショオに対しても、先生と言って敬意を表していたが、その時のかれにも、その位の節度はあったように思う。無論、当時のわたしは、かれに対して何の好意ももたなかったし、新聞紙上にあ

られるその言行にも、馬鹿など思うだけだった。しかしそれでも、実際の経験では、多少とも違うものを感じたのである。

もちろん田中は優れた研究者であったから、違うものを感じた自分自身をも客観視できたのであろう。続く部分で、権力の地位にある者の印象は、特別の条件の下にあること、公人は公文書や実際の政治行動によって判断されるべきであること、そして愛敬のよさなどから、公人に甘い期待を持つことは大変な誤りであるとして次のように結んでいる。

こういう場合、わたしたちは何を信ずべきであろうか。権力の地位にある者の印象は、やはり特別の条件の下にある。わたしたちは公人としてのかれらを、やはり公文書や実際の政治行動によって判断すべきであって、個人的会議における愛敬のよさなどから、甘いことを期待したりするのは、大へんな間違いだと思ふ<sup>135)</sup>。

荒木貞夫が陸相として映画『非常時日本』に出演してから90年、荒木の逝去からも半世紀以上の年月が流れた。しかし田中のこの言葉は、残念ながら今もって日本社会に対する警句たりえている。荒木にまつわる諸問題は、姿を変えながら、現在にも存在しているのである。

## 注

- 1) 『戦友』第262号、1932年4月。
- 2) 小田部雄次、「荒木貞夫」(『日本大百科全書』、小学館)、江口圭一、「荒木貞夫」(『世界大百科事典』、平凡社)、高橋正衛、「荒木貞夫」(『国史大辞典』、吉川弘文館)。
- 3) 原田高一、『巨星荒木陸相を語る』、三友出版社、1933年3月、序。
- 4) 笹子修三、「硬骨陸相 荒木貞夫」(同『努力か天才か風雲時代』、趣味の教育普及会、1932年)143-175頁、帆刈芳之助、『貧乏を征服した人々』、泰文館、1939年2

- 月、3-10頁。福地重孝、『軍国日本の形成——士族意識の展開とその終末』、春秋社、1959年、52-59頁。
- 5) 守田貞記、『皇道維新と荒木イズム』、皇道館川崎政治学院、1933年11月、1頁。
  - 6) 渡辺哲雄、「軍国日本の人情将軍——荒木貞夫」(同『現代知識の展望——附・非常時日本に躍る人々』、警世社、1934年3月) 附録3頁、小林知治、『激動日本人物群像』、国防攻究会、1939年9月、50頁。
  - 7) 「初大臣を訪ねて(四)／陸相の処世訓 刀の哲学」(『東京朝日新聞』1931年12月17日) 11面、「新大臣の横顔 日本刀「祐定」のやうな新陸相荒木貞夫」(『実業の日本』第35巻第2号、1932年1月) など多数。
  - 8) 荒木貞夫、「結婚に際して愛する錦子へ！」(『主婦の友』第17巻第4号、1933年4月)。
  - 9) 「新大臣を良人に持つ奥様の願ひ(6) 陸軍大臣荒木貞夫夫人 荒木錦子様」(『主婦の友』第16巻第2号、1932年2月)、高信峽水、「陸軍大臣荒木貞夫中将の母堂」(『主婦の友』第16巻第4号、1932年4月)、「(口絵) 我家の家庭教育 朝稽古 陸軍大臣荒木貞夫閣下」(『婦人倶楽部』第14巻第11号、1933年11月)、「父大将に見せたいね 車に潜る二つ星 荒木貞発君たゞ今広東入／確に見たぞ 文相目を細め破顔」(『東京朝日新聞』1938年11月15日) 11面、「陸軍大臣の愛犬訓練日記」(確氷元『軍用犬訓練の写真図解』、狼吟荘、1933年11月)、荒木貞発、「鍛錬第一主義の父・荒木貞夫」(森田英亮編『父母を語る』、金星堂、1939年) など多数。
  - 10) 竹田敏彦、「戯曲 荒木陸相(二場)」(『雄弁』第24巻第5号、1933年5月)。
  - 11) 宜野座葉央見、「“小春日和の平和”における非常時——映画『非常時日本』のイデオロギー」(岩本憲児編『日本映画とナショナリズム 1931-1945』、森話社、2004年) 30-61頁。
  - 12) 橘川学、『嵐と闘ふ哲将荒木』、荒木貞夫將軍伝記編纂刊行会、1955年、219-221頁。
  - 13) 福山城外、『南国閑話』、鹿児島新聞社、1936年5月、104頁。挿絵画家で著名な伊藤彦造(1904~2004)も荒木貞夫から「あらき」をもらい伊藤新樹と称し(早川清一、「魔粧仏心」(『さしゑ』第3号、1956年2月))、朝鮮半島では創氏改名に際して「荒木貞夫になりたがる青年」もいた(鷹橋掬二、『日の丸少年の死』、新生社書店、1943年2月、128頁)。
  - 14) 小樽出身で松竹蒲田に所属した荒木春子は、「丸顔で洋装のピタリと似合う美人」で映画『女人哀楽』でデビューしたが、「荒木大将のあの何者にも恐れずといつた断乎としたところが好き」と荒木貞夫を崇拜し、「所長に懇願して」荒木貞子と改名した。「映画トピック」(『雄弁』第25巻第1号、1934年1月)。荒木貞子の活躍について

- は、『映画と演芸』（第11巻第8号，1934年8月），『国際写真新聞』（第46号，1934年2月），『キネマ旬報』（第505号，1934年5月11日），「蒲田スター ニック・ネーム考」（『国際写真新聞』第60号，1934年5月）も参照。
- 15) 文壇では島崎藤村が筆頭で7～8円，菊池寛は3円前後，画家の平福百穂，書家の小野鶯堂が10円，政治家では山県有朋10円，犬養毅5～6円，斎藤実5円，徳川家達10円，高橋是清15円の中，荒木の書は10円で現存の軍人では筆頭だった（読売新聞社便利部編，『こんな物が金になる』，八重洲書房，1936年10月，145頁）。
- 16) 「撃鼓吹貝」（『大日』第71号，1934年1月15日）。
- 17) これは江戸時代の剣豪荒木又右衛門を講談で語る際の常套句だった（玉田玉秀斎講演，『日本武士道の権化 荒木又右衛門』，立川文明堂，1910年10月，1頁，他多数）。また荒木貞夫が揮毫した荒木又右衛門の碑も作られた（「（歴史と人）昭和の荒木又右衛門」（『人物往来 歴史読本』第5巻第2号，1960年2月）。同じく軍人の永田鉄山に対しても「永田の前に永田なく，永田の後に永田なし」という言い方がなされたが（森靖夫，『永田鉄山——平和維持は軍人の最大責務なり』，ミネルヴァ書房，2011年，i頁），これも荒木又右衛門に対する常套句に由来しよう。
- 18) 戦時中に総理大臣を務め東京裁判でA級戦犯の判決を受けて処刑された東条英機についても本格的な伝記が存在しないことが指摘されている。牛村圭，「東条英機の東京裁判」（『比較法制研究』第41号，2018年12月）。
- 19) 富田武，「荒木貞夫のソ連観とソ連の対日政策」（『成蹊法学』第67号，2008年3月）。
- 20) 対照的に統制派を代表する永田鉄山については複数の研究者が注目している。森靖夫，前掲『永田鉄山』，川田稔，『昭和陸軍の軌跡——永田鉄山の構想とその分岐』，中央公論新社，2011年，小林道彦，「三月事件再考——宇垣一成と永田鉄山」（『日本歴史』第713号，2007年10月），藤村和巳，「「合理適正居士」永田鉄山の理想と誤算——陸軍派閥対立と国家総力戦構想」（『政治経済史学』第527号，2010年9月），堀茂，「第一次大戦後帝国陸軍「革新」幕僚の志向とその施策——“ファシリテーター”永田鉄山による「総力戦体制」構築への「国防の国民化」」（『政治経済史学』第593号，2016年5月）など。
- 21) 橋川学，『秘録陸軍裏面史——将軍荒木の七十年』（上巻，大和書房，1954年）及び橋川学，前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』。
- 22) 橋川学は1910年に秋田県に生まれ，法政大学法学部を経て，報知新聞政治部記者となり，1942年同紙が読売新聞と合併した際に荒木貞夫他の推薦で朝日新聞に移った。戦後公職を追放されたが，荒木のほか今村均，田崎仁義らの支援で「誠・礼節・信義

- を实践要綱として日本人の真姿顕現を目標とする」温故知新会を組織した。荒木貞夫の愛弟子にしてソ聯通として知られた。藤井五一郎、「序文」（橘川学，前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』），橘川学，『荒木将軍の実像——その哲と情に学ぶ』，泰流社，1987年，302頁。
- 23) 辻村花雄，「非常時の軍部を担ふ人々」（『実業の日本』第36巻第23号，1933年12月）。
- 24) 武田泰淳，『政治家の文章』，岩波新書，1960年，59頁。
- 25) 「天声人語」（『朝日新聞』1956年4月23日）1面。
- 26) 「QRマイクの広場1年を顧みる 反響呼んだ“荒木発言”」（『読売新聞』1956年12月29日）8面。
- 27) 「元大将“閣下”の発言」（『週刊現代』第7巻第33号，1965年8月19日）。
- 28) 前掲「天声人語」，「無責任なA級戦犯」（『読売新聞』1956年4月24日）8面，「放送塔」（『読売新聞』1962年12月10日）5面。
- 29) 泰郁彦，『軍ファシズム運動史——3月事件から2・26後まで』，河出書房新社，1962年，72-78頁。
- 30) 宜野座菜央見，前掲「“小春日和の平和”における非常時」。
- 31) 後々田寿徳，「荒木貞夫と「国家の興隆と博物館の重要使命」について」（『東北芸術工科大学紀要』第12号，2005年3月），同，「荒木貞夫にみる日中戦争期の博物館像（1）」（『東北芸術工科大学紀要』第13号，2006年3月），同，「荒木貞夫にみる日中戦争期の博物館像（2）」（『東北芸術工科大学紀要』第14号，2007年3月）。
- 32) 富田武，前掲「荒木貞夫のソ連観とソ連の対日政策」。
- 33) 桑田翔，「荒木貞夫陸相期の陸軍と経済政策」（『東京大学日本史学研究室紀要』第25号，2021年3月）。
- 34) 荒木貞夫の弟で海軍少将の荒木貞亮は，1934年から翌年まで上海特別陸戦隊司令官として上海に駐在している。
- 35) 荒木貞夫，「山東出兵と済南事件」（『銀行通信録』第85巻第509号，1928年6月）。少なくとも荒木は4度，①日露戦争，②ロシアより帰国後のハルビン滞在，③参謀本部第一部長時代の大陸訪問，④陸大学長時代の南満洲卒業旅行，で中国大陸に足を踏み入れている。ただ関内の訪問は1度のみである。
- 36) 荒木の著作や講演録である『国防の基礎』（国本社川越支部，1929年），『昭和日本の使命』（社会教育協会，1932年），『全日本国民に告ぐ』（大道書院，1933年2月11日），『非常時の認識と青年の覚悟』（文明社，1934年1月），『日本国民たるの信念に生よ』（聯合通信社，1934年8月），『日本青年の道』（三笠書房，1937年1月），『何故



- 戦争は不可避か?』(皇文社書店, 1937年7月), 『戦争』(三笠書房, 1937年8月), 『身を捨て、こそ——戦争と国民の覚悟』(三笠書房, 1937年10月), 『魂』(錦城出版社, 1943年) など多数。
- 37) 橘川学, 前掲『秘録陸軍裏面史』34-43頁。
- 38) 多賀宗之(1872-1935): 東京に生まれ, 1902年に直隸総督袁世凱の招聘を受けて保定に赴任した。1911年に参謀本部附に転じ, 北京に駐在中に辛亥革命を迎えた。第二革命に際しては孫文や胡漢民を助け, 青島守備軍司令部附, 青島軍政署附を経て, 1917年に江蘇督軍顧問となり, 1923年に予備役に編入された。黒龍会編, 『東亜先覚志士記伝』下巻, 黒龍会出版部, 1936年, 784-786頁。
- 39) 橘川学, 前掲『秘録陸軍裏面史』69-70頁。
- 40) 原田高一『巨星荒木陸相を語る』三友出版社, 1933年, 口絵。
- 41) 橘川学, 前掲『秘録陸軍裏面史』93-157頁。
- 42) 荒木貞夫, 前掲『非常時の認識と青年の覚悟』92頁。
- 43) 荒木貞夫, 「敗け戦を勝った日露戦争」(『動向』第1248号, 1966年4月)。荒木と宇都宮太郎との関係については本書の矢野真太郎論文も参考のこと。
- 44) 「陸軍大学校卒業式」(『読売新聞』1907年11月30日) 2面。
- 45) 荒木貞夫, 「西伯利の開発と邦人の覚悟」(『実業公論』第5巻第3号, 1919年3月), 荒木貞夫, 「世界の謎・露西亜民族の解剖」(『東洋時報』第276号, 1921年9月)。
- 46) 荒木貞夫, 「ロシア文学を語る」(『話』第2巻第1号, 1934年1月)。
- 47) 荒木貞夫, 「ロシアの民族性と藝術」(『月刊ロシア』第1巻第1号, 1935年7月)。
- 48) 荒木貞夫, 前掲「ロシア文学を語る」。
- 49) 荒木貞夫, 「対蘇政策に対する主張」(『東洋』第39巻第7号, 1936年7月)。
- 50) 荒木貞夫, 前掲「ロシアの民族性と藝術」。
- 51) 正式名はシトウ・フォン・ニシガハラと言い, 両親ともにドイツから輸入されたシェパード犬だった。日本各地で訓練の実演をおこない, 映画『十字砲火』やラジオ「殊勲の軍犬」にも出演した。碓氷元, 『シェパード犬——訓練と飼育』, 高陽書院, 1953年, 58-59頁。
- 52) 荒木貞夫, 前掲「山東出兵と済南事件」, 橘川学, 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』68頁。
- 53) 橘川学, 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』96頁。
- 54) 長野朗, 『支那事典』, 建設社, 1940年, 101頁。
- 55) 二木謙三(1873-1966)は玄米食の提唱などで知られた細菌学者で, 荒木の話は二木の『食物と健康』(修養団出版部, 1921年, 附録)の「二食説」や「一食説」を前

提にしていると考えられる。

- 56) 荒木貞夫述，前掲『全日本国民に告ぐ』5-7頁。同じ話は前掲『魂』にも載っている。
- 57) 荒木貞夫述，前掲『昭和日本の使命』11頁，荒木貞夫述，前掲『全日本国民に告ぐ』10頁，荒木貞夫述，『荒木陸軍大臣閣下御講演要旨』（岐阜県青年教育研究会，1933年）2頁など。
- 58) 橋川学，前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』94頁。
- 59) 荒木貞夫，前掲「山東出兵と済南事件」。
- 60) 荒木貞夫，「蒋介石に与ふると共に我が同胞に懇ふ」（『文藝春秋』第16巻第9号，1937年8月）。
- 61) 同年5月20日，帰途に学生を引率して京城を訪問しており，見学旅行は3月から5月初旬にまで及ぶものだったことがわかる。ハウライ生，「荒木閣下を京城に迎えて」（『軍事警察雑誌』第23巻第8号，1929年8月）。
- 62) 橋川学，前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』103-104頁。
- 63) 荒木貞夫，前掲『非常時の認識と青年の覚悟』67-69頁。
- 64) 松重充浩，「植民地大連における華人社会の展開——1920年代初頭大連華商団体の活動を中心に」（曾田三郎編著『近代中国と日本——提携と敵対の半世紀』，御茶の水書房，2001年）。
- 65) 荒木貞夫述，前掲『昭和日本の使命』15-16頁。
- 66) 荒木貞夫，前掲『非常時の認識と青年の覚悟』72，96頁。
- 67) 荒木貞夫述，前掲『昭和日本の使命』17頁。
- 68) 第23聯隊聯隊長（1919年7月～21年4月）あるいは第6師団師団長（1929年8月～31年8月）の時期。
- 69) 荒木貞夫，「日本国民よ、魂を持って！」（『雄弁』第24巻第1号，1933年1月）。
- 70) 少なくとも荒木貞夫述，『国民更生の根本義』（中央教化団体联合会，1932年），前掲「日本国民よ、魂を持って！」，前掲『荒木陸軍大臣閣下御講演要旨』，内田康哉・荒木貞夫，『非常時教本』（趣味の教育普及会，1933年），前掲『全日本国民に告ぐ』，前掲『日本青年の道』，前掲『魂』に同じ話が確認できる。まさに荒木貞夫の十八番と言える。
- 71) 荒木貞夫述，前掲『昭和日本の使命』29頁。
- 72) 中国が国ではないという主張は明治末から確認できるが（香川悦二，『支那旅行便覧』，博文館，1906年，161頁等），より人口に膾炙するようになったのは矢野仁一，「支那は国に非る論」（『外交時報』第35巻第6号，1922年3月）以後のことである。

- 「中国非国論」については判沢純太、「辛亥革命の処理——抗争と妥協と」（『国際学論集』第Ⅲ巻第1号，1980年1月），久保亨，「同時代日本の中華民国認識——矢野仁一の中国論を中心に」（久保亨・嵯峨隆編著，『中華民国の憲政と独裁——1912-1949』，慶應義塾大学出版会，2011年）も参照。
- 73) 岩切登，「(国会随想) 高橋是清翁」（『国会』第13巻第6号，1960年6月）。
  - 74) 四宮憲章，『皇国か帝国か』，龍宿山房，1943年，49頁。
  - 75) 橋川学，前掲『秘録陸軍裏面史』363頁。
  - 76) 平間洋一，『第一次世界大戦と日本海軍——外交と軍事との接続』，慶應義塾大学出版会，1998年，318頁。
  - 77) 大塚宇三郎編，『日清交戦実記』，大塚宇三郎，1894年11月13日，65頁，車江散史編，『海陸大捷 征清戦史』，盛文館，1894年11月11日，2頁，阪元盛徳，『東洋経略管見』，阪本盛徳，1894年12月，3頁など，開戦直後から複数確認できる。
  - 78) 荒木陸軍大臣述・大阪毎日新聞社編『非常時日本の同胞に懇ふ』大阪毎日新聞社，1933年，口絵。
  - 79) 荒木貞夫述，前掲『全日本国民に告ぐ』8-10，16，18頁。
  - 80) 荒木貞夫，「武人縦横録」（『中央公論』第47巻第13号，1932年12月）。
  - 81) 荒木貞夫述，前掲『昭和日本の使命』36-38頁。
  - 82) 筑紫次郎，「陸軍が生んだ雄弁家」（『雄弁』第18巻第6号，1927年6月）。
  - 83) 「荒木陸相の提唱 東京で平和会議 東洋関係国を招請 満洲国承認問題も解決」（『東京日日新聞』1933年10月30日）2面。
  - 84) 「東洋平和会議は尚早」（『東京朝日新聞』1933年10月31日）3面。
  - 85) 佐々弘雄，『続人物春秋』，改造社，1935年，35頁。
  - 86) 稲葉生，「安南独立運動と木堂先生」（『木堂雑誌』第12巻第8号，1935年8月），犬養道子，『ある歴史の娘』，中公文庫，1980年，7-27頁。
  - 87) 田中正明，『光また還える——アジア独立秘話』，日本週報社，1958年，34-35頁。
  - 88) 橋川学，前掲『秘録陸軍裏面史』241頁。
  - 89) 橋川学，前掲『秘録陸軍裏面史』198頁。
  - 90) 詳細は本書の矢野真太郎論文を参照のこと。
  - 91) 橋川学，前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』434頁。
  - 92) 三宅晴輝，『経済天気図』，要書房，1953年，118-119頁。
  - 93) 荒木貞夫述，『戦争はどうなる——時局と国民の覚悟』，東京朝野新聞出版部，1937年11月，9-12頁。
  - 94) 荒木貞夫述，前掲『戦争はどうなる』26-27頁。

- 95) 荒木貞夫, 「時局收拾の大道」(『日本及日本人』第362号, 1938年7月)。
- 96) 荒木貞夫述, 『非常時局に対して所信を述ぶ』, 国策研究社, 1938年, 11-12頁。
- 97) 荒木貞夫, 『皇国の軍人精神』, 朝風社, 1933年2月, 32頁。
- 98) 荒木貞夫, 『其後の荒木大将に聴く——記者と一問一答』, 秀光書房, 1936年7月, 19頁。
- 99) 橋川学, 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』502-512頁。「荒木大将参議辞退」(『朝日新聞』1940年9月30日) 1面。
- 100) 荒木貞夫, 「事変四周年に際して——対支処理への我が所信を言ふ」(『経済マガジン』1941年7月号)。
- 101) 橋川学, 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』390頁。
- 102) 佐々弘雄, 前掲『続人物春秋』28頁。
- 103) 清沢洌も日記に「文相は近来, すべて素人だ。荒木大将もそうだし, 橋田〔邦彦〕とてもそうだ。こっかのために深愛にたえず……」と批判的に記している。清沢洌, 『暗黒日記』, 評論社, 1979年, 57頁, 昭和18年4月24日の条。
- 104) 厳しい評価として, 東京裁判で鈴木貞一の弁護人を務めた戒能通孝の「証人台に立って反対訊問を受ける立場に追いこめられ, 虎髭を恐怖にふるわせつつ真剣な弁解に躍起となった荒木貞夫など, どこからみても「超人」とはいいい得ない矮小・凡俗の人間」などがある。戒能通孝, 『インテリゲンチァ』, 要書房, 1952年, 128頁。他も哲学者の山崎謙が大川周明を説明する文脈で次のように荒木に言及したが, これは偏見というものであろう。「大川の顔は青黒くゆがんだ神経質な, 俗にいう怪奇な骨相を呈していたが, 明らかにあれは一種の気ちがい型であって, 類型的に云うなら, 東条英機や荒木貞夫やヒットラーやムッソリーニ等々の一連のお歴々の顔にただよっていたあの不気味な妖気と共通の要素を, そなえていた。これらはすべて, 健康な顔つきでない。法医学的な角度からみたら, 多分「犯罪型」というタイプに包括されるところであろう」, 山崎謙, 『人間変革の論理』, 青木書店, 1952年, 19頁。
- 105) 山浦貫一, 『非常時局と人物』, 信正社, 1937年, 129頁。
- 106) 「精神主義を説く——荒木貞夫被告」(読売法廷記者共著, 清瀬一郎関, 『25被告の表情』, 労働文化社, 1948年) 36頁。
- 107) 笹川良一述, 桜洋一郎編, 『笹川良一の見た巣鴨の表情——戦犯獄中秘話』, 文化人書房, 1949年, 205頁。
- 108) 橋川学, 前掲『荒木将軍の実像』271-272頁。
- 109) 「戦犯廿五被告に判決下る」(『朝日新聞』1948年11月13日) 1面。
- 110) 「荒木元大将仮出所」(『読売新聞』1955年6月15日) 7面。

- 111) 「立ち上る！ 元A級戦犯」(『週刊東京』第4巻第17号, 1958年4月26日)。現在は  
 狛江弁財天池特別緑地保全地区となっている。
- 112) 「日出造見参 やァこんにちは(第157回) 元陸軍大将荒木貞夫氏」(『週刊読売』第  
 15巻第32号, 1956年7月22日)。
- 113) 「閑雲十年」(『読売グラフ』第435号, 1955年8月23日)。
- 114) 有竹修二, 前掲『風雲三十年』252-253頁。
- 115) 荒木貞夫, 「スガモ断腸の記——獄舎を出てて感あり」(『文藝春秋』第33巻第21  
 号, 1955年11月)。
- 116) 荒木貞夫, 「新しき日本へ」(『先見経済』第563号, 1956年5月5日)。
- 117) 有竹修二編, 『荒木貞夫風雲三十年』, 芙蓉書房, 1975年, 「はじめに」(1955年  
 秋)。
- 118) 阿部真之助, 「昭和政治史」(岡沢一夫編, 『新女性全書 教養篇』, 鎌倉文庫, 1948  
 年) 14頁。
- 119) 荒木貞夫・中村メイコ, 「老將軍と女優」(『週刊明星』第1巻第23号, 1958年12月  
 28日)。
- 120) 「わたしの健康・長寿法」(『週刊読売』第16巻第1号, 1957年1月6日)。
- 121) 橘川学, 前掲『秘録陸軍裏面史』212頁。
- 122) 荒木貞夫, 「ソ連考察の鍵」(『先見経済』第580号, 1956年7月30日)。
- 123) 黒川武雄, 「眼を病んで憶う——緑陰随想」(『新民』第9巻第8号, 1958年8月)。
- 124) 菅原通済, 『通済美術ばなし』, 淡交新社, 1961年, 9-10頁。
- 125) 菅原通済, 『女六十花ざかり』, 常盤山文庫出版部, 1961年, 198-199頁。
- 126) 「風雪十三年——陸海両軍の最長老 元陸軍大臣陸軍大将 荒木貞夫氏」(『丸』第11  
 巻第4号, 1958年3月)。
- 127) 荒木貞夫, 前掲「新しき日本へ」。
- 128) 荒木貞夫, 「海国日本と大陸」(『大陸問題』第5巻第6号, 1956年6月)。
- 129) 「岸首相訪米問題アンケート」(『大陸問題』第6巻第6号, 1957年6月)。
- 130) 「日本の防衛問題アンケート」(『大陸問題』第15巻第7号, 1966年7月)。
- 131) 荒木貞夫・中村メイコ, 前掲「老將軍と女優」。
- 132) 菅原裕, 「荒木貞夫將軍の御葬儀を終えて」(『偕行』第186号, 1966年12月)。
- 133) 大宅壮一, 「荒木元大将の死」(1966年11月)(同『大宅壮一の本2 人物鑑定法  
 (上)』, サンケイ新聞出版局, 1968年) 341頁。
- 134) 金沢誠・川北洋太郎・湯浅泰雄編, 『華族——明治百年の側面史』, 講談社, 1968  
 年, 26頁。

135) 田中美知太郎, 『正説と逆説』, 新潮社, 1959年, 63頁。